



- 青年海外協力隊
- シニア海外ボランティア
- 日本を元気にする青年海外協力隊

## イベント・ 座談会採録記事コーナー

### 日本も元気にする青年海外協力隊in四国トークショー

#### 協力隊の経験で私はこう変わった

福留 皆さんは海外でどんな活動をし、今どういう活動をしているのか。

平田 私は水泳指導のため中米のホンジュラスに派遣された。レクリエーションセンターにある小さなプールで、主に初心者の子どもを指導していた。大学時代に運動指導の経験があったので、プールが使えない時は地方の小学校や社会福祉施設をまわって、スポーツを体験してもらうなどしていた。レクリエーションセンターには大人も来るので、折り紙教室や料理教室といった文化教室などを企画して、日本文化を紹介した。

現在は、日本語サークル「わ」の会という、在住外国人の日本語学習を支援するボランティアグループのメンバーとして活動している。外国人、日本人にこだわることなく、支援を必要としている人に支援できることをやっていくことをモットーに、メンバーは総勢25人前後。最近では週3回から4回、高松市の小中学校に出向いて日本語を母語としない子どもたちの日本語学習を支援している。

渡部 私は、コーヒーで有名なグアテマラ共和国で環境教育隊員として活動した。1年目はジャングル地帯において密輸の摘発で保護された動物を育て、森に返す救援保護活動を行った。2、3年目はカリブ海地域へ拠点を移し、サンゴやマングローブなど動植物を調査し、調査結果などを地元の小学生に伝える巡回授業を行った。そのエリアにすむ生物と環境がどんなつながりを持っているのか、自然環境を守っていくことがどう生活とつながっていくのかなどつながりを重視した活動をしてきた。

今は愛媛県西条市にある「石鎚ふれあいの里」で、自然解説員の仕事をしています。西条市は海から山まで、海拔0mから1982mまであり、さまざまな地点にすむ生物を調べ、解説している。また、石鎚山周辺の地区に残っている「暮らしの知恵」をお年寄りから学んでいる。石鎚の自然やお年寄りから聞いたいろいろな話を、体験型教室を通して多くの人に知ってもらおうことが、地域特有の自然・文化を守っていくことにつながっていくと思い、活動している。

藤田 私は20歳の時に養鶏の指導員として南米のパラグアイに行ってきた。私の任地は奥地でスペイン語がまったく通じない田舎。ネイティブインディアが多い地域で、グアラニー語が使われていた。スペイン語を一生懸命覚えて行ったのに、まったく通じなかった。一から言葉の勉強をやり直して、いざ仕事をと思ったら、養鶏で行ったにもかかわらず、現地で計画の変更があり、鶏が一匹もない。井戸掘りから始めて、帰国前に何とか鶏を飼うことができた。

私は協力隊の仕事を終えて帰国したら、農業をやりたいという思いがあり、就農の場と手段を求めてサラリーマンをやっていた。5年ほど経ったところに高知に転勤になり、やってきたのが四万十川の周辺でものすごく自然豊かなところ。そこに魅せられ、思い切って脱サラ。今は2万7千平方mの敷地に鶏を放し飼いにした「しゅりの里」を運営している。高齢化・過疎化の里を守るという意味で「しゅりの里」と名付けた。

新野 私が行っていたのは、ニジェール共和国。現地では、栄養士として公共の診療所で五歳未満児健診の手伝いをした。健診の待ち時間に、お母さん方を相手に食事から日常生活のことまで、色々な話をした。健診の終わる午後からは、健診に来ない家庭を訪問。全国一斉のポリオワクチンの接種週間には、人海戦術でワクチンのボックスを持って、1軒1軒回っていく。私も参加し、気温四十度の炎天下を歩き続けの3日間で、現場の大変さを実感した。任期の最後の頃は、海外から食糧援助が入り、現場で配給作業も手伝った。



コーディネーター  
キャスター  
福留 功男さん



高松の小中学校で外国人生徒の日本語学習支援

香川県高松市  
日本語サークル「わ」の会  
平田 百合子さん



石鎚山麓の自然や伝統を守る

愛媛県西条市  
石鎚ふれあいの里 自然解説員  
渡部 幸さん

帰国後は、徳島県吉野川市にあるさくら診療所で管理栄養士として勤務。協力隊派遣前から働いていた診療所で、院長をはじめ、スタッフにも協力隊のOGやOBが何人かいたこともあり、帰国後も同じ職場に戻ることができた。今は患者に食事の話をしたり、病院食を作ったり、地域で食と健康をテーマにした講演を行ったりしている。

## 現地で直面した文化・考え方の違い

福留 日本の文化や自分の物差しとまったく違うと思ったことは。

渡部 水をたくさん使うという日本の文化そのままに現地入りしたが、グアテマラは水のない地域だった。現地では使い捨て容器が当たり前に使われていて、それを捨てる。捨てるのを見て「もったいない。洗って使えるプラスチックにしたらいのに」と話すと、「洗う水があるなら、飲み水にする」と答える。プラスチック容器の方がいいという考え方は、日本人の発想だと思った。

新野 自分の目標はあくまで自分の目標で、現地の人たちがその目標を同じスピードでやろうとしているわけではない。もっとゆっくりしたペースでもいいと思えるようになったのは、ようやく会話もできるようになった1年後くらいのこと。

福留 想定していたことがすべて通用しなくなった時の対応の仕方は。

藤田 言葉が通じないと何もできないから、最初はパニック。私の周りには、協力隊の人が一人もいなくて、日本語を話す環境になかったので、必死でやったら3カ月ほどで覚えられた。

福留 水泳指導の場合、日本だと保護者がついてくるが、現地の保護者との違いは。

平田 レクリエーションセンターに来られる家庭は中流以上。現地では、優雅に子どもをレクリエーションセンターに連れてこられる階層と、地方出身で主婦のいない間にその家の家事をする層というように、女性の生活は二分化されていると感じた。

## 自分が帰っても継続できることを

福留 日本にない環境に入って、もう帰ろうと思ったことは。

新野 帰ろうと思ったことはなかった。というのは、私が住んでいた家の近くには町で一番大きな病院があった。病院の周辺は恵まれた場所で断水も停電も少なく、生活自体に困ったことはなかった。

福留 平田さんは、なぜ青年海外協力隊として行きたいと思ったのか。

平田 私は小学校の卒業文集に「海外に行きたい」と書いていて、その思いが心のどこかにあったのだと思う。大学卒業を控え、採用試験を受けようかというところに、バスの中で協力隊のチラシを見て、海外に行こうと決めた。

福留 日本で使われている炭も実は熱帯のマングローブ林から作られたもの。現地ではどうだったか。

渡部 失われていく動植物がとて多く、その原因を作っているのが、いわゆる先進国といわれる日本や米国、欧州。現地の人々は、自分たちの住む環境を切り売りすることで外貨を得ている。その現状を知り、私たちは外国産のものについてもっと周りの環境を含めて考えなくてはいけない。そのことを日本に帰って伝えていこうと思った。

福留 現地の人たちの自主性を重んじ、JICAはあくまでサポート側。その理想と現実のギャップは。

藤田 私の頭の中には常に「自助努力」という言葉があった。私が帰っても、現地の人々が継続できることをしようと思った。井戸を掘るなら時間がかかっても手で掘る。水をくむポンプを買うのではなく、バケツでくむということだ。



高知の高齢化進む山里で放し飼い養鶏

高知県幡多郡三原村  
放し飼い地鶏 しゅりの里代表  
藤田 守さん



吉野川市の過疎地域の食と健康を守る

徳島県吉野川市  
さくら診療所 管理栄養士  
新野 和枝さん





## がんばれる源は人との深いかかわり

福留 現地での活動を支えたものとは。

新野 私が会った現地の人たちは、生活環境は非常に厳しいが、地域のことが好きな人ばかり。「ここに来てくれてありがとう」という気持ちが伝わってきた。少しでもその人たちやその地域のために役に立ちたいという思いでやってきた。

平田 心配してくれる人が近くにいてくれてありがたかった。そのおかげで、現地の普通の生活を知ることができた。同僚の粗末な家にご飯に呼ばれたりすることで、みんなと一体感が生まれた。そういう心のサポートが、私が最後までがんばれる支えになった。

渡部 仲間の支援が大きかった。プライベートがないくらい、いろいろな人が家にやってきた。熱を出してつらそうにしていると、心配した友人たちが入れ替わり、立ち代り家にやってくる。私は何かサポートできればと思っていたのだが、逆にいろいろなことを教えてもらった。いろいろな人たちとのかかわりが勇気になったし、最後まで頑張れる源にもなった。

藤田 日本に帰国してびっくりしたのは、日本人が全然活力のない目をしているように感じたこと。それに比べて現地の人々は、生き生きしている。私はパラグアイにいた2年余りの間、ご飯を作ったことがなかった。夕方になると、みんなが庭先に集まってきて食事が始まる。だから帰国する時期が近づくにつれて、逆に帰りたくなくなっていた。

## 今の仕事に生きる現地で学んだこと

福留 青年海外協力隊での経験は、今の仕事にどう生かされているのか。

新野 帰国後は積極的に診療所の外に出かけ、地域の人たちとかかわるようにした。話をする時にどうしたら分かりやすく伝えられるか考えるようになった。

藤田 ゼロからスタートして、一つ一つのことに大きな喜びを感じられるようになった。今の私の仕事では、高齢・過疎化が進む中で何とか若者たちを呼び戻す活動をゆっくりやっていきたい。

渡部 日本に帰ってきてからは、基本的に話をするのはおじいちゃん、おばあちゃん。その人たちとの雑談の中で、話に隠れている昔の知恵を教わる。そのきっかけづくりが、現地でやってきたこととつながっている。

平田 現地では教科書で習わない言葉がよく使われる。それを現地の方が、実際にバスに乗り、町を連れ歩いてくれるながら教えてくれたことに今も感謝している。それが今の日本語の学習を支援する側としての活動に大いに役立っている。

福留 全てが違う環境の中で2年間頑張る青年海外協力隊は、私たちが失ったものを持っていると思う。協力隊はもう必要ないという人がいるが、私はそうは思わない。青年海外協力隊の経験を生かしながら、地域のために活躍する経験者の声を聞いて、明日からの生活に少しでも元気を与えることが出来れば何よりだし、若い人にはぜひ、チャレンジして欲しいし、今日の話を家族や友人にぜひ広めて行って欲しい。